

Prajāpati の骨盤が外れた神話

西村直子

0. はじめに

黒 Yajurveda 学派の brāhmaṇa には, Prajāpati (以下 P.) が諸生物を創り出した後に骨盤が緩み外れた, という短い神話が伝えられている。「骨盤」はある種の土器と同じ *ukhā*-の語で呼ばれ, P. は 2 つの土器 (*ukhā*) を用いて自らの骨盤 (*ukhā*, du.¹⁾) を治療する。この事が, 祭式のある場面で *ukhā* を 2 つ用いる由来として語られ, 現実の祭式における道具の使用が P. の治療を意図するという, 一種の呪術的構造を以て説明される。また GELDNER 及び SCARLATA が指摘するとおり, Ṛgveda IV 19,9 にある *ukhachid*-「火鉢／骨盤を裂く者」という表現がこの神話の背景に想定される²⁾。

ukhā の製法は, RAU によって明らかにされている (→注 8)。辞書類の第一義には加熱調理用の容器である事が挙げられるが, これに併記される火を入れる鉢としての使用も古くまで遡れる可能性を示唆する要素も見出される³⁾。各印欧語に報告されている対応語彙は音韻上正確な一致を示さないが, 依然として考慮に入れる価値はあろう。*ukhā* という語は元来, 容器を謂う言葉であり, それがある場面では身体の一部を指す言葉として転用されたと考えられる⁴⁾。本稿では P. の骨盤が外れたことを語る神話を中心に, 祭式道具としての *ukhā* の使用法とこれにまつわる神話の展開を跡づきたい。

1. 神話の概略

MS IV 1,3:4,8-10⁵⁾ *prajāpatiḥ prajā asṛjata. tāsyoḥké asramsetām. sā etāhyām ukhābhyām prātyadhata. yād eté ukhé bhāvataḥ prajāpater evókhé prátidadhāti.*

P. は生き物達を放出した (創り出した)。彼の 2 つの *ukhā* は外れた。彼はこの (現に用いられている) 2 つの *ukhā* を用いて自らを元通りにした。ここにある 2 つの *ukhā* が用いられるのは, 他ならぬ P. の両 *ukhā* を [祭官は] 元通りにすることになる⁶⁾。

(260)

Prajāpati の骨盤が外れた神話 (西 村)

この神話は、新月祭・満月祭を基本形とする“穀物祭”(Iṣṭi, Haviryajña)における、upavasatha (準備日)の晩の搾乳と dadhi 製造の br. に含まれる。搾乳及び牛乳の加熱は準備日の晩と翌朝(本祭当日)とに行われ、当該神話は、それぞれ1つずつ、合計2つの ukhā 使用の意義づけとして語られる⁷⁾。Taittirīya 派の平行は、TB III 2,3,1 に収められる(→3.)。黒 Yajurveda 学派は一致して同じ場面に関して当該神話を伝えるが、白 Yajurveda 学派の対応箇所 ŚB I 7,1 は類似の神話を持っていない。

2. *ukhā-/ukhā-*

男性名詞 *ukhā-* は AV XI 3,18 (~AVP XVI 53,7) にのみ在証されるが、*ukhā-* (fem.) は RV 以来用例がある。YV 諸学派の br. はその製造過程を詳細に伝えており、RAU 1972, 16-17 によって纏められている⁸⁾。

先述 1. 及び注 7 のような加熱容器としての用法が伝えられる一方、神話中には移動中に祭火を入れておく容器としての用法も見られる。例えば、人間が最初に手に入れた祭火の由来を伝える Purūravas と Urvaśī の神話では、Purūravas は Gandharva 達から与えられた火を ukhā に入れて持ち帰る⁹⁾。また、Vāmadeva が異部族(非インド・アーリヤカ)の女性 Kusitāyī/Kusidāyī と戦車競争を行う説話において、Vāmadeva は *úkhya-* (この語は AV, YS^{m+}) *agni-* 「ukhā に入れた火」を持っている¹⁰⁾。これらの神話には、インド・アーリヤ諸部族のインド亜大陸入植以前、インド・イラン共通時代の痕跡が認められる事が近年指摘されており(→注 10)、移動中の火入れ容器としての使用も、往古の遊牧時代まで遡りうると考えられる。更に、Agnicayana 祭の準備期間に祭主が ukhā に火を入れて首に掛け、1年間保持するのは、移住遊牧時代の模倣儀礼と考えられる。このような、移動時に火を運ぶ為の容器としての用法は、定住化が進む過程で次第に減少し、Agnicayana のような祭式中にその痕跡を留めたものと推測される。

3. 骨盤としての *ukhā*

P. の神話の Taittirīya 派 version, TB III 2,3,1^{p11)} は、同派が先述の MS 及び KS とは異なる神学議論上の発展段階にあった事を示唆している。TB 独自の要素として、P. が創出したのが諸生物ではなく祭式である点、P. と祭式との同一視、ukhā の使用が *sāmnāyya* (< 語根 *nī* + *sām*) という特定の供物と関連づけられている点が挙げられる。*sāmnāyya* は、整備されたシュラウタ祭式では特別な新月祭の供物と

して位置づけられる¹²⁾。Taittirīya 派は、他 2 派が明示しなかった要素を議論に組み込み、同派における祭式の整備は MS 及び KS より進んでいたものと推測される。III 7,4 (ee) に *sámnīta-*, *śr̥tá-*, *dádhi-* が見られる点も、同様に解される。

ŚB VI 6,2,15¹³⁾ [Agnicayana, Dīkṣā] (~ŚBK VIII 6,2) には、*ukhā* :: *samidh* 「焼き木」= *ātman* 「胴体」:: *garbha* 「胎児」という対比が見られ、骨盤としての *ukhā* の位置づけが白 YV 学派内部で独自に拡張された可能性が考えられる。

4. P. の骨盤神話の展開

4.1. ŚB I 6,3,35-37¹⁴⁾ [満月祭の *upavasatha*] では骨盤だけでなく諸々の関節が緩み外れた、と弛緩する部位が拡大されている。また、P. の治療法についても、2つの *ukhā* を用いる事によって骨盤を元通りにする、という黒 YV 学派に対し、ŚB は *ukhā* には言及せず、*Agnihotra* 等の定期的に行う *Haviryajña* によって諸関節が接合されるとし、文脈の点でも特定の祭式行為から祭式全体へと拡張している。この点は、Taittirīya 派が独自に伝える「P. が祭式を創り出した」という伝承と共通の背景を持つ可能性も否定できない。

4.2. 全学派に共通する要素が動詞語根 *sram*s 「緩む」である点も注目される。白 YV 学派において、P. が緩んだという神話モチーフは、更なる展開を遂げる。ŚB VII 1,2,9-10¹⁵⁾ [Agnicayana, Pravargya] (~ŚBK VIII 8,3) は、同派における P. と *ukhā* とを同置する議論である。ただし、主眼は P. の復活 (全身的治療) にあり、黒 YV が伝える *ukhā* 使用の由来を語る神話とは大きく異なる。

5. 結論

ŚB I 6,3 の神話 (→ 4.1.) は、黒 YV 学派が「搾乳と *dadhi* 製造」章で言及する、P. の骨盤が外れた神話を改作したものと考えられる。黒 YV では、*upavasatha* の晩と本祭当日の朝との搾乳及び加熱に計 2つの *ukhā* を用いる由来が説明される。ŚB では骨盤から諸関節へと弛緩部位を拡張し、P. の治療は *Agnihotra* 等の定期的な諸 *Haviryajña* による 1 年間の接合または連結の適切な維持と対照され、文脈の面からも意図の拡張が読み取れる。新月満月祭では、満月祭の *upavasatha* を *sampratī* 「直ちに」行う事が P. の治療につながるとされる。

当該箇所先立つ ŚB I 6,3,31 以降には、*úttarām* 「後の (または「次の」) [夜] に」*upavasatha* を行うという選択肢の利点を挙げつつも、やはり直ちに *upavasatha* を行うべきだと結論づける議論がある。また、後の I 6,4 には「新月祭の *upavasatha*

(262)

Prajāpati の骨盤が外れた神話 (西 村)

をいつ行うべきか」という議論も含まれている。更に、Agnicayana 祭では空の *ukhā* が P. そのものであるとし、P. 復活という新しい議論へと展開する。白 YV 学派は、黒 YV 学派が伝える神話を改作し、より大きな枠組みで神学議論を再構成する為に採用したものと考えられる。

RV の *ukhachid-* (→注2) も、これらの論点から「骨盤を裂く」と解釈するのが自然であり、Windisch が指摘するように、何らかの麻痺状態、「腰を抜かす」のような慣用表現であったと考えるのが自然であろう¹⁶⁾。

- 1) 左右対称の形状を両数で示したものか。Caraka-Saṁhitā IV 7 [Śārīrasthāna, śārīrasaṁkhyā] では、骨盤の骨 (śroṇiphala) の数は2つとされる。出産時、骨盤の靭帯は弛緩して骨盤を可動性にし、胎子の通過を助ける (骨部産道) (山内亮監修『最新家畜臨床繁殖学』朝倉書店, 1998, p. 179ff.). 難産の1つに骨盤狭窄がある (同 pp. 291-292). また、分娩後の障害に産後起立不能症 (産後麻痺) があり、P. の状態にこの症状が想定されていた可能性もある。ただし、その発生要因は十分には解析されていないという (同 p. 307).
- 2) RV IV 19,9 *vamrībhiḥ putrām agrīvo adānām¹ nivésanād dhariva ā jabhartha | vy āndhó akhyad āhim ādadāno¹ nir bhūd ukhachit sám aranta pārva ||* 「処女の息子が蟻達に嚙られている所を、Hari 達を駆る者よ、君は巢から (救って) 運んで来た。盲目の者がはっきりともものを見た、蛇を捕った後で、骨盤を裂く者は逃れ出る (免れる)。関節達は結合する」。Cf. GELDNER 1951 の当該箇所に対する注, SCARLATA 1999, 131, WINDISCH 1888, 115, NEISSER 1924, 170 s.v. *ukhāchid* („der einen Hüftbruch erlitten hat“). *ukhā-chid-* の語形について、cf. AiG II-1 49, §21 β: 複合語前肢の女性名詞語幹の短音化。Pāṇini VI 3,65 も同様の現象を教えるものと考えられる (尾園絢一氏の教示による)。
- 3) PW s.v. *ukhā-*: 1) m. a) Kochtopf, Schüssel . . . , 2) *ukhā-* f. a) Kochtopf; Feuerschüssel, - b) ein best. Theil des Körpers; EWAia s.v. *ukhā-*: m. Kochtopf, Schüssel (AV), *ukhā-* f. Kochtopf, Pfanne, Feuerschüssel (RV+), *ukhya-* in der Feuerschüssel befindlich (AV, VS+).
- 4) 類似の例として、ギリシャ語の *kotulē* が指摘されている、cf. WINDISCH 1888.
- 5) ~ KS XXXI 2:2,14-16^p (KapS XLVII 2:334,15-336,5^p).
- 6) MānŚrSū I 1,3,9-10 では、*ukhā* ではなく *kumbhī* 「深鍋」が挙げられている: *pariṣṭṛṇāti pūrvam agnim aparau ca. |9| uttarato gārhapatyasya saṁstīrṇe dvedve prayunakti kumbhyau śākhāpavitram nidāne dohanam proksānīm. |10|* 「祭火の周りに、東側に [敷き草を] 撒きひろげる、また西側に。G 祭火の北側に、撒き終わった所に、2つずつ揃えて置く、2つの *kumbhī*, 浄めの枝、2本の端綱、搾乳桶、清めの水を」、cf. 西村 2014, 注 30.
- 7) 空の *ukhā* を火に掛けてそこに搾った牛乳を入れて熱する。例えば MS IV 1,3,4,18^p *dyāur asi. pṛthivy asī-(I 1,3:2,6)īty. ābhyām evāinām prāvṛṇakti* 「『君は天だ。君は大地だ』と [祭官は唱える]。他ならぬこれら両者 (天と大地) の為に当の物 (*ukhā*) を火に掛ける事になる。」動詞 *prā-vṛj* は、ŚrSū. では *ādhi-śri* に置き換えられている、cf. VārŚrSū I 2,13; MānŚrSū I 1,3,19(後半)-20. Cf. 西村 2014, 注 36-38 (和訳あり)。

- 8) *ukhā* は丸く, 3 又は 5 本の陶土の帯を重ね上げて作られる. 平底 (直径約 0.24 m) で, 時に 9 つの角を持つ (*navāsri*-KS). 高さ約 0.24–0.40 m, 開口部直径 0.24–1.20 m. 4 分の 3 の高さに, 恐らく第 2 と第 3 の陶土の帯の繋ぎ目に当たる場所に, 補強の為の陶土のベルトが巻かれる. 側面の底部からこのベルトの所まで, 陶土の帯が 4 本, 安定の為に垂直に押し当てられ, それらの上部は 2, 4, 6, 又は 8 つの「乳首」(*stana*-) で終わる (単位換算は RAU 1972 に基づく). *br.* の翻訳は同書 24–53. *Pravargya* 祭で用いる *Mahāvīra* との比較については, cf. 井狩 1975.
- 9) MS I 6,12:106,6^p 及び KS VIII 10:93,17^p. これに対し, ŚB XI 5,1,13 では *sthālī* (RAU 1972, 447) を使用している. *BaudhŚrSū* XVIII 45 および *VādhAnvākh* I 2 のバージョンは容器に言及しない. 神話全体の枠組みとその背景については, cf. Gotō 2000.
- 10) MS II 1,11:13,4–5^p: *sò 'gnīm úkhyam ávaiṣata* 「彼 (*Vāmadeva*) は *ukhā* の中の火に目を落とした」 ~KS X 5:130,5^p. Cf. 後藤 2008 及び 2014.
- 11) TB III 2,3,1^p *prajāpatir yajñām asṛjata. | tāsyoḥé asraṃsetām. | yajñó vai prajāpatiḥ. | yát sāmñāyyokhé bhávataḥ | yajñásyaiva tád ukhé úpadadhāty. áprasraṃsāya. |* 「P. は祭式を創り出した. 彼の 2 つの *ukhā* (骨盤) は外れた. 祭式が P. なのだ. 2 つの *sāmñāyya* の *ukhā* が用いられるという事は, その事によって, 他ならぬ祭式の 2 つの *ukhā* (鉢 = 骨盤) を置き添えることになる. 外れ落ちないようにである」; TB III 7,4,13^m (ee) *áprasraṃsāya yajñásya | ukhé úpadadhāmy ahám | pasúbhiḥ sāmñītam bibhṛtām | indrāya śṛtām dādhi |* 「祭式が外れ落ちないように, *ukhā* を 2 つ, 私は [火に] 置き添える. 家畜達によって集め寄せられたものを, *śṛta* (加熱された乳) を, そして *dadhi* を, [2 つの *ukhā* は] *Indra* の為に保持せよ。」 TB III 7,4–6 は, *Taittirīya* 派独自の *mantra* 集である. III 7,4 全体の構成とその意義については, cf. 西村 2014.
- 12) Cf. 西村 2010.
- 13) *tád vá ātmāivòkhā | yónir muñjāḥ sāñā jarāyūlbam ghṛtam gárbhaḥ samít. ||15|| báhyokhá bhávati | ántare muñjā. báhyó hy ātmá . . . etébhyo vai jáyamāno jāyate. tébhya evāinam etáj janayati. ||16||* 「15. その際, *ukhā* は胴体 (*ātmān*-) なのだ. *Muñja* 草達は子宮である. 麻の布は *jarāyu* (胎盤等の胎児付属物) である. *ghṛta* は *ulba* (羊膜) である. 祭火を燃え立たせる為の焚き木は胎児である. 16. *ukhā* は外側において用いられる. 内側において *Muñja* 草達が [用いられる]. 胴体は外側に, 子宮は内側に [ある] から…これら (胴体以下 *ulba* まで) によって, 生まれつつある [胎児] は生まれるのだ. 他ならぬこれらによって, 当の者 (*Agni*) を [祭主は] 産み造ることになる。」 Cf. ŚB VI 6,1,24. *ulba* 及び *jarāyu* については cf. NISHIMURA 2012–2013.
- 14) *prajāpater ha vai prajāḥ sasṛjānāsya | párvāni visasraṃsuḥ. sá vai samvatsará evá prajāpatis. tásyaitāni párvāny ahorātrāyoḥ samdhī paurṇamāsī cāmāvāsya cartumukhāni. ||35|| sá visrastaiḥ párvabhiḥ | ná śasāka sāmhātum. tám etáir haviryajñáir devá abhiṣajyann. agnihotrēnaivāhorātrāyoḥ samdhī tát párvābhiṣajyaṃs. tát sámadadhuḥ. paurṇamāsena caivāmāvāsyaena ca paurṇamāsīm cāmāvāsyaṃ ca tát párvā . . . cāturmāsyaír evārtumukhāni tát párvā. . . ||36|| . . . sá yó haivám vidvānt sampraty úpavāsati sampratí haivá prajāpateḥ párvā bhiṣajyaty. ávati hainam prajāpatiḥ. sá evám evānnādo bhavati yá evám vidvānt*

(264)

Prajāpati の骨盤が外れた神話 (西 村)

saṃpraty upavāsati. tasmād u saṃpraty evópavaset. ||37|| 「35. 生き物達を創造し終えた P. の諸関節は緩み外れたのだ. 彼は 1 年間に他ならないのだ, P. は. 彼のこれらの諸関節 (というものは, 昼と夜との両接合点である, 満月の夜と新月 (朔) の夜とである, 季節の諸前面 (始まり) である. 36. 彼は, 緩み外れた諸関節によって, 身を起こす (原義は「立ち上がろうとして身を縮める」) ことができなかった. 彼を, これらの Haviryajña 達を用いて, 神々は治療した (imperfect). 他ならぬ Agnihotra 祭を用いて昼と夜との両接合点であるその関節を [神々は] 治療した. それを接合した. 他ならぬ満月祭と新月祭とを用いて, 満月の夜と朔の夜であるその関節を…他ならぬ Cāturmāsya 祭達を用いて季節の諸前面であるその関節を…それを接合した. 37. …その際, つまり, このように知りつつ, 直ちに upavasatha を行う者は, まさしく直ちに, つまり, P. の関節を治療することになる. 当人を, つまり, P. は援助する. その際, このように知りつつ直ちに upavasatha を行う者は, まさしくこのように食物を食べる者 (支配階級) となる. それ故, 他方, ひとほまさしく直ちに upavasatha を行うべきである.」 Cf. GONDA 1986, 49. *saṃpratī* 「直ちに」は, 恐らく満月が上るのを見て, または上ると判断してからすぐに, を謂うものと考えられる. 満月は, 日没と同時に東の空に現れる. 当該箇所先立つ I 6,3,31 以降の議論は, *úttarām* 「後の/次の [夜] に」 upavasatha を行う事の是非を問題としている. この *úttarām* との対比を考慮すると, 白 YV 派の新月満月祭の議論においても, 黒 YV 学派と同様, 動詞 *vas + úpa* 「(祭火の) 側で夜を過ごす」及び *upavasathá-* 「祭火の側で夜を過ごす事」の語義には, *vas* の原義「夜を過ごす」に由来する要素が明確に残されていると考えられる.

- 15) *sá yáñ sá prajāpatir vyásraṃsata | ayám evá sá yò 'yám agnís cīyate. tād yád eṣòkhā riktá séte purá pravárjanād yáthaivá tát prajāpatir útkrānte prāñá útkrānte vīryè sruté 'nne riktó 'śayad etád asya tād rūpám.* ||9|| *tám agnáu právrñakti | yáthaivāinam adó deváh právrñjams. tād yá enām právrñktām agnir āróhati yá evāsmāt sá prāñó madhyatá udákrāmat sá evāinam sá āpadyate. tám asmín dadhāty.* . . ||10|| 「9. その際, かの P. が緩み外れた所のもの, 他ならぬこれがこの火 [壇] として築かれている所のそれである. その際, この *ukhā* が空の状態, 火にかける事に先だって横たわっている時, まさしく P. が, 息が歩み出た時, 生命力が歩み出た時, 食物が流れ出た時, 空の状態横たわっていたように, これ (空の *ukhā*) が彼のその (時の) 姿である. 10. それ (*ukhā*) を火にかける, まさしくあたかも当の者 (P.) をかつて神々が火にかけたかのように. その事によって, 当の物 (*ukhā*) が火にかけられるとそれに火が上る時に, 彼から中央から歩み出た他ならぬその氣息, その同じそれが当の者に入り込む [ことになる]. それを彼の中に定め置く… (以下, *rukma* (祭主が 1 年間身につける金か銀の飾り) の保持によって生命力が, 点火用の焚き木達の設置によって食物が定め置かれることになるという議論が続く)].
- 16) Cf. WINDISCH 1888, 115: RV VIII 68 (79), 2 *prém andháh khyan niñ sronó bhūt.* 「盲者はものをはっきり見る. 麻痺した (不随の) 者は逃れ出る (治る)」と平行関係にあると判断される事から, *ukhachid-* は *sroná-* 'lahm' に対応する状態と解される.

〈参考文献〉

- GELDNER, Karl Friedlich. 1951. *Der Rig-Veda*. 3 Bde. Harvard Oriental Series 33, 34, 35. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- GONDA, Jan. 1986. *Prajāpati's Rise to Higher Rank*. Leiden: E. J. Brill.
- 後藤敏文 2008 「部族の火の東進——『ヴェーダ』の神話、儀礼とその歴史的背景」長田俊樹『環境変化とインダス文明 2007 年度成果報告書』総合地球学研究所, 127-140.
- 2014 「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える」『国際哲学研究』3: 43-57.
- GOTŌ, Toshifumi. 2000. “‘Purūravas und Urvaśī’ aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. Ikari).” In *Anusantatyai*, hgg. Almut Hintze und Eva Tichy, 79-110. Münchener Studien zur Sprachwissenschaft, Beiheft 19. Dettelbach: J. H. Röhl.
- 井狩彌介 1975 「Ukhā と Mahāvīra」『印仏研』23 (2): 1057-1046.
- NEISSER, Walter. 1924. *Zum Wörterbuch des Ṛgveda*. Erstes Heft. Abhandlungen f.d. Kunde d. Morgenlandes 16-4. Leipzig: Brockhaus.
- 西村直子 2010 「ヴェーダ文献における発酵乳と Soma の神話—— sāmnāyya を中心として」『論集』37: 114-97.
- 2013 「タイッティリーヤ・ブラーフマナにおける新月祭・満月祭のマントラ——Upavasatha に関する III 7,4 を中心として」『論集』40: 150-125.
- 2014 「Maitrāyaṇī-Saṁhitā I 1,3^m (IV 1,3^p) ——新月祭・満月祭の upavasatha における搾乳と dadhi 製造——」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 271-285.
- NISHIMURA, Naoko. 2012-2013. “ūlba- and jarāyu-: Foetal Appendage in the Veda.” *Journal of Indological Studies* 24/25: 169-186.
- RAU, Wilhelm. 1957. *Staat und Gesellschaft im Alten Indien*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- . 1972. *Töpferei und Tongeschirr im vedischen Indien*. Wiesbaden: Verlag der Akademie des Wissenschaften und der Literatur.
- SCARLATA, Sarvatole. 1999. *Die Wurzelkomposita im Ṛg-Veda*. Wiesbaden: Dr Ludwig Reichert.
- WINDISCH, Ernst. 1888. “Vedisches.” In *Festgruss an Otto von Böthlingk*, hgg. Rudolf von Roth, 114-118. Stuttgart: W. Kohlhammer.

(平成 27 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 24520048 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 ukhā, Prajāpati, Yajurveda, 新月祭・満月祭, Agnicayana

(東北大学専門研究員, 博士 (文学))